

# 私 の 工 夫

## 通級指導教室から つながりを大切に

津山市立北小学校 通級指導教室

指導教諭 照井 理栄



### 1 はじめに

「先生、この1年で何とかかなりま  
すかね。」

昨年春、ある保護者から投げか  
けられた言葉だ。これから指導を  
開始するという初日。「通級指導  
教室」はまさに「通り過ぎる教室」  
なのだと思われた一言だった。

本教室は、特別支援教育の充実  
に資する中核施設として整備され、  
津山市の特別支援教育推進センタ  
ー機能を有する教室である。通常  
学級に在籍する特別なニーズのあ  
る児童の状態や発達段階、特性に  
応じた指導・実践を行っている。

ここに赴任して2年目の春を迎

えた。目の前の子どもを中心に、  
多くの人と関わることのできる場  
所だ。1年目を振り返りながら、  
新しいことに挑戦したいと考えて  
いる。

### 2 保護者・在籍校との連携

本教室では、毎月「くすのき」  
という通級便りを発行している。

通級に通う児童から担任の先生へ  
便りの入った封筒を手渡ししても  
らい、また返してもらおう。たかが  
封筒の受け渡しもまた、指導の一  
つとなっている。職員が輪番で作  
成しているが、この封筒をより有  
効に使えるかと思ひ、毎月在籍  
校の先生、保護者に担当者便りを  
発行することにした。一人一人の

通級予定がわかるようにし、子ど  
もたちが在籍する学校・学級から  
温かく送り出してもらおうための一  
助になってほしい、また保護者に  
は、同じ親としての思いを、担任  
の先生には学級作りに関わるヒン  
トを届けたいとも考えた。

返ってくる封筒には、担任の先  
生からの手紙が同封されることが  
増えていった。通級する児童の姿  
や担任としての悩みが綴られる。  
頂いた手紙を基に電話での情報交  
換時に話題が広がることもあった。  
送迎する保護者からは、同じ親



教室便り「くすのき」と担当者が発行する「あおぞら」

### 3 子どもとのつながり

としての悩みを共感的に捉え、「先  
生も一緒なのですわね」という言葉  
とともに、家庭での暮らしについて  
など多くの話ができた。

本教室から発信する便りがあつ  
て、担当者として連携するための  
ツールが持てたことは大変ありが  
たいことだったと思う。目の前の  
子どものために、しっかりと大人  
ががつながっていきたいと考えてい  
る。

担当する児童の中には、構音指  
導を必要とする児童がいる。「発  
音」を正しいものにするために、  
毎週一単位時間通って来る。自分  
自身が指導者としてのスキルを身  
に付けなければならいことが何よ  
りの課題である。そして、ともす  
れば単調になりがちな発音練習を  
いかに飽きさせずに繰り返し取り  
組ませるかポイントだ。

絵カードやすごろくを使いなが  
ら指導する。課題となる「音」が  
一人一人異なるため、その子に合



すごろくを使って発音練習に取り組む児童

った教材選びや教材作りが必要だ。ある児童に「ケ」の正しい音を習得させる指導過程で、力行音全てを扱ったすごろくを使用していた。目標とする音に絞った指導をしたと考え、全てのマスに「ケ」が入った単語（例えば、けしごむ、しいたけ、かけっこ、など）を書き込んだすごろくを作成した。すごろくの楽しさもあり、毎回自分から「すごろくがしたい」と取り組んだ。

「『ケ』スペシャル」と名付けて発音練習に励んでいた児童は、正しく発音できるようになると、

「次は、『キ』で作ってほしい」と話した。自分の課題を意識し、前向きに取り組む姿勢を感じ、とても嬉しかった。子どもたちの課題と興味関心を正しく捉え、今後教材の工夫を続けながら、自身のスキルアップを目指していきたい。

#### 4 通常学級とのつながり

通常学級の担任をしているとき、「どうすればAさんも一緒に学べるだろう」と悩むことが多くあった。例えば、そんなときに頼りにしていたのはここ「通級指導教室」だった。いざその立場に立ったときに、自分に何ができるのか。学習指導要領にも学びの過程で考えられる困難さごとに具体例が示されている。そして、それらを普段の授業で実践している教員は大勢いる。その具体例を写真と簡単な解説と一緒にした、事例紹介を始めた。校内の誰もが気軽に見られるように、校務支援システムを使って配信を始めた。

学級開き一つとっても、それぞれの先生方の技が光る。担任をしていけば、他の学級の様子を見に行くこともままならない。写真一枚の情報発信ではあるが、校内で共有することで話題が広がる。それぞれの工夫をお互いに取り入れていくことで、最後は子どもたちへと還元される。誰もがわかる指導へとつなげていきたい。



各クラスの実践を紹介する「教室から吹く風」

#### 5 終わりに

昨年春「この1年で……」と尋ねられた保護者の児童は、年度末

に指導を終了した。通級幼児部での基礎指導のたまものであり、また本人の努力のたまものだ。指導しながらも学ぶことの多かった時間だった。「終了」することは喜ばしいことなのに、別れはやはりさみしいと感じる。しかし、ここは「通う教室」であり、「通り過ぎる教室」でなければならぬのだ。子どもたちが、それぞれの在籍校で自分らしく、幸せに過ごしていけるように、限りある時間の中で心血を注いだ指導ができる通級担当者でありたいと思う。

「百日後に 変化を

千日後に 成長を

一万日後に 夢を」

これは本教室の開設時に副校長であった、尊敬する大先輩の言葉だ。夢を抱き、夢を語り、夢を実現できる大人に育てる責任がある。その責任を全うするために、今年もまた、目の前の子どもたちを中心に、して多くの人とつながりを持ち、通級指導教室としての役割を果たしていきたい。